

B—1 事例

|     |   |     |  |
|-----|---|-----|--|
| 32H | 番 | 氏 名 |  |
|-----|---|-----|--|

田中ツルさんの事例

田中ツルさん（76歳）は、81歳の夫、太郎さんと自宅で二人暮らしである。ツルさんも太郎さんも年金生活者である。ある朝、ツルさんは呂律が回らず、右手足のしびれがあり受診したところ脳梗塞と診断を受けた。治療を受けたが右片麻痺と言語障害が残った。立ち上がったたり歩いたりすることは、手すりや支えがあれば可能である。右利きである。家事（掃除、洗濯、食事の買い出しと調理）を自分一人ですることは困難である。排泄や入浴で一部介助が必要である。築40年の自宅は、段差が多い。また、トイレも和式である。部屋には、ベッドとポータブルトイレがある。血圧が高いため服薬している。言語訓練をしているが、思うように言葉が出ない。「自宅で暮らし続けたい」と強く思っている。最近では、夫の介護疲れが見られ「夫の介護の負担を軽くしたい」「自分でできることは自分でしなければ」という焦りと不安がある。ツルさんは、仲間と温泉旅行に出かけその仲間と交流を持っていたが、一人では外出できないため、「もう温泉にも行けないし、仲間と会えない」と悲観的な考えを持っている。田中さん夫婦には長男家族がいるが、長男は転勤が多く、現在は、他県で暮らしている。